

輝きを増したイタリアの宝石

フランチェスコ・カフィーソが日本デビューしてから、まだ1年しかたっていないとは、巻き起こした反響の大きさに比べると、ちょっと信じがたい。彼は1989年5月24日生まれだから、現在は17歳になったところだが、この日本での第2作『天国への7つの階段』を聴くと、もうその若さだけに驚く必要がないほど、頼もしい演奏をくりひろげている。フランチェスコにとって、日本デビュー作で初のスタジオ録音になった『ニューヨーク・ララバイ』では、デヴィッド・ヘイズルタイン・トリオと9曲のスタンダードを披露したが、今作は同じスタンダード集でありながら、イタリアのジャズ・ミュージシャンを起用したローマ録音（2006年1月4日&5日）、選曲もほとんど自分で決定するなど、制作アプローチとしては大きな違いがあったようだ。『天国への7つの階段』でのフランチェスコは、もとより素晴らしいサウンドに、表現という強い味方をつけ、ストーリーを語るようになっている。具体的に言えば、吹きすぎるところが減り、音と音の間で語ることを覚え、ある種の余裕すら感じさせるのだ。わたしたち聴き手は、その間に自分の感情を書き込むことができるから、ぐっと共感性が増すわけである。その演奏から、もぎたての果実の香りをかくのは、彼がシチリア島出身だからだろうか。

＊ ＊ ＊

そのフランチャスコ・カフィーソが、この1年間に成した業績をまず振り返ってみたい。まず受賞歴から書いておくと、06年初頭、デビュー作『ニューヨーク・ララバイ』が、スイングジャーナル誌主催ジャズディスク大賞で、ニュースター賞（海外部門）に輝いた。その直後に、イタリアのジャズ誌「Top Jazz」でも、やはり05年度のベスト・ニュー・タレントに選出されている。演奏活動では、05年7月にチャーリー・パーカーの没後50年を記念して、ウンブリア・ジャズ・フェスティヴァルが、フランチェスコをフィーチャーし、パーカーが残した名作『ウィズ・ストリングス』のレパートリーを、もちろんウィズ・ストリングスで聴くコンサートを開催。このライブはレコーディングされ、『トリビュート・トゥ・チャーリー・パーカー』と題され大きな話題を呼んだ。パーカーへのオマージュは続き、フランチェスコは「チャーリー・パーカー・レガシー・バンド」の一員としても起用された。同バンドはマルグリュー・ミラー(p)、ロニー・マッシューズ(p)、ジミー・コブ(ds)、ジェシー・デイヴィス(g)、レイ・ドラモンド(b)、ヴィンセント・ハーリング(as)、ウェス・アンダーソン(as)らというそうそうたるメンバーを擁し、フランス、スペインなどEU各地のジャズフェスで公演を行った。06年2月には、ベリーニ音楽院をフルート専攻で卒業（と同時に、今もイタリアの高校に籍をおいている）、06年4月には、ウンブリア・ジャズ・インNYの一環で、バードランドにレギュラー・トリオを率いて出演。フランチェスコ・カフィーソは、NYでもおなじみの顔になりつつあるのである。

＊ ＊ ＊

実は、彼はその間に初来日公演も行った。05年11月5日と6日、銀座のブランド各店が音頭をとって街をあげて行われた第1回ギンザ・インターナショナル・ジャズ・フェスティヴァル2005に来日したのだ。このときはイタリアのメンバーとのカルテット編成で、アンコール以外はすべてフランチェスコのオリジナルを演奏するという、うれしい意外性をもつものだった。彼の書くオリジナルは、シンコペーションに工夫をこらしたのだから、ハード・バップの匂いがするもの、朗々としたプレイで聴かせるバラ

Seven Steps To Heaven 天国への7つの階段 Francesco Cafiso Quartet フランチェスコ・カフィーソ・カルテット

- 天国への7つの階段** Seven Steps To Heaven 〈V. Feldman〉(6:44)
- グリーン・チムニー** Green Chimneys 〈T. Monk〉(7:11)
- イエスタデイズ** Yesterdays 〈J. Kern〉(7:02)
- オン・ザ・トレイル** On The Trail 〈F. Grofe〉(9:39)
- マイ・ファニー・バレンタイン** My Funny Valentine 〈R. Rodgers〉(8:03)
- マイルストーンズ** Milestones 〈M. Davis〉(6:46)
- クレイジーオロジー** Crazeology 〈B. Harris〉(5:27)
- スカイラーク** Skylark 〈H. Carmichael〉(6:00)

フランチェスコ・カフィーソ Francesco Cafiso 〈alto sax〉
アンドレア・ポッツァ Andrea Pozza 〈piano〉
アルド・ズニーノ Aldo Zunino 〈bass〉
ニコラ・アンジェルッチ Nicola Angelucci 〈drums〉

録音：2006年1月4、5日　ローマ

© 2006 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

＊

Produced by Tetsuo Hara
Recorded in Rome on January 4 & 5 , 2006
Mixed and Mastered by Venus 24bit hyper Magnum Sound：
Shuji Kitamura and Tetsuo Hara
Photos：© Paolo Soriani
Artist Management：M. G. M. Produzioni Musicali
Designed by Taz

ードまでと多岐にわたり、彼の吸収力のすごさ、作曲家としても大いに期待できることを見せつけた。彼がステージが上がったとき、会場では「かわいいわね」という声が囁き交わされていたが、終了後は「すごい」「驚いた」という声が圧倒的に多かった。5日のコンサートは、一般公募した方を抽選でシャネルネクスサスホールに招待して行われたため、チケットをゲットできなかったジャズ・ファンにしてみれば、一日も早い2度目の来日公演を待ちたいところだろう。翌日のサルヴァトーレフェラガモ銀座本店でのショーは、入場もフリーだったため観客が多数詰めかけ、整理が大変だったと聞く。関係者も、フランチェスコの人気と実力に、目を丸くしたのだった。筆者は、この機会に05年5月のオーストラリア、メルボルンでのジャズフェスに続き、再び彼のライブを見ることができたが、リーダーとしてグループを牽引する力、また作曲面での冒険に、今まで知らなかった面を発見し目を見張った。ヴィーナスレコードの原哲夫氏も見えていて、次回のレコーディングに入りたいと言っていた曲もあったが、これはオリジナル曲集『ハッピー・タイム』（伊CAMレーベル）としてイタリアで発売されたため、この新作に収められることはなかった。とはいえ、パーカーのレパートリー・ウィズ・ストリングス、オリジナル集、そして本スタンダード集と、異なる内容の作品を3枚も立て続けに発表するとは、やはりフランチェスコ・カフィーソはただものではない。

＊ ＊ ＊

タイトル曲の　天国への7つの階段　は、ヴィクター・フェルドマンのペンになるが、名演が多いことで知られている。フランチェスコは、飛び抜けたテクニックで高速で飛ばしていく。階段を速く駆上がった、彼らしいプレイといえるのかもしれない。若きドラマー、ニコラ・アンジェルッ

チのソロも聴きもので、彼はこの夏にヴィーナスレコードに彼らのピアノ・トリオを録音することが決まっている。2曲目のセロニアス・モンク曲　グリーンチムニー　は、シンコペーションと即興演奏の面白さをフランチェスコの肉体を通して表現している。秀逸なそのセンスに、息をのむ。この『天国への7つの階段』は、まず前作がバラードづくしだったのに比して、アップ・テンポの曲が多いのが目立つ中、3曲目ジェローム・カーンの　イエスタデイ　こそは、王道バラード演奏でじっくり聴かせる。　オン・ザ・トレイル　は、元来民謡だったものをクラシック系の作曲家であるグロフが「グランドキャニオン交響曲」のなかの1曲として、発展させ書いたもの。のんびりした曲想は、山道を題材にただけあって、山岳地帯の多いシチリア島を故郷にもつフランチェスコには、なつかしかっただろう。肩の力を抜いて、楽しげに演奏しているのが伝わってくる。　マイ・ファニー・ヴァレンタイン　は、めずらしくタンゴで演奏されている。フランチェスコの音の出し方に、彼自身の工夫が見て取れ、成長を感じる1曲だ。マイルストーン　は、マイルス・デイヴィスの残した曲だが、フランチェスコはベースのアルド・ズニーノとのデュオで全編を吹き切る。ベニー・ハリスの　クレイジーオロジー　はカルテットが一丸となって繰り広げるアップ・テンポの演奏に、目がまわらないよう要注意だ。ラストのホーギー・カーマイケルの　スカイラーク　は、ピアノのアンドレア・ポッツァとのデュオで、しっとりとしたバラードで。フランチェスコは以前より深まったエモーションをこめ、ストーリーが語る風景を聴き手にも見せるようにたっぷりと演奏している。この8曲は、実はほとんどがファースト・テイクであり、ライブ感をもってレコーディングされた。大変な集中力であり、すでにフランチェスコが多くの引き出しをもち、

そこから自在にイマジネーションを取りだす術をもっていることの証左だ。これからの成長が楽しみであると同時に、ここまでの彼の進化をほめたいと思う。「イタリアが生んだ宝石」（ウィントン・マルサリス）が、原石から練磨され、その輝きを見せ始めたのだ。

＊ ＊ ＊

イタリアはシチリア島生まれのこの若きアルト奏者が、インタビューをしていて目に涙をためるのは、母親のことでも地元の友人のことでもなく、「シシリー」と彼が発音するときである。彼はこんな風に話すのだ。「ぼくはシチリア島出身で名前を多くの人に知ってもらった、初めてで、たった一人のジャズ・ミュージシャンなんだ。シシリーのためにも、がんばらなくてはといつも思うんだ」地中海に浮かぶ最大の島、シチリアは先ほどもふれたが、山岳地帯が多くを占める。だからこそ美しい海岸線をもち、強く照りつける陽光のもとオレンジやレモンの香りがただよい、色とりどりの花が咲き乱れる島だ。映画「ゴッドファーザー」にあったように、貧しさゆえにマフィアを生んだ土地柄ではあるものの、元来地中海の要にあることから、この島は歴史のなかで様々な権力の争奪の対象になってきた。そのため今でも各所にギリシャ、ローマ時代の遺跡があり、ルネッサンス文化も時代を超えて息づいている。そんな土地の空気を吸って、育ってきたフランチェスコである。時を超え、様々な時代の要素を自身のジャズにとりこむのは、お手の物なのかもしれない。フランチェスコ・カフィーソのスタンダードに、瑞々しくかぐわしい花の香りをかくのも、シチリアの花々の移り香なのかもしれない。

2006年6月記　中川ヨウ / Yo Nakagawa